

歴史はマルクス主義の復興を日程に登場させた。十月革命精神の勝利は必然である！

## ～二〇一三年十月集会の基調報告～

日本共産党（行動派）中央委員会  
書記長 森 久

はじめに

本日の集会に出席された幹部と活動家の皆さんの常日頃の活躍に心から尊敬と敬意を表します。この十月集会を開催するたびに私たちは改めてわが党の歴史的伝統とその革命的思想、徳田球一の獄中十八年の「十月革命精神」、マルクス主義と共産主義の不滅性を確信するものであります。

現代の歴史時代こそ、徳田球一が獄中十八年から出獄する直前と同じであり、歴史上の大転換からマルクス主義党の再編成へと同じ過程を通過しつつあります。帝国主義支配（アメリカの一極世界支配）の終えん、独占資本主義の時代からコミュニティー共同体への転換を求めて激動しています。そのため「もう一度マルクス主義を読み直そう」というマルクス主義復興運動が深く、静かに発展し、前進しています（八月、九月中にマルクス主義に関する本が五種類出版）。ここにマルクス自身が予告したとおりの歴史時代が出現しているのです。

『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』（一八五一—五二年）の中で書いているプロレタリア革命（人民革命）の運命に関するその予言は次の通りであります。

『一九世紀の諸革命のようなプロレタリア革命は、絶えず自分自身を批判し、進みながらもたえずたちどまり、すでになしとげられたと思えたものにたちもどっては、もう一度新しくやりなおし、自分をはじめにやった試みの中途半端な点、弱い点、けちくさい点を、情け容赦もなく、徹底的に嘲笑する。この革命が敵を投げたおしても、その敵は大地から新しい力を吸いとり、まえよりも巨大な姿となって起きあがり、革命にはむかってくる結果としかならないように見える。この革命は、自分の立てた目的が茫漠（ぼうぼく）として巨大なことに驚いて、たえずくりかえし尻込みするが、ついに、絶対にあともしできない情勢がつくりだされ、諸関係自身がこう叫ぶようになる。

ここがロドスだ、ここで跳べ！

ここにバラがある、ここで踊れ！』

マルクスのこの一文、この予言の核心は「歴史は前へ進む。旧体制は崩壊し、新しい体制の出現は歴史の必然である。そしてそれは旧体制の矛盾が最高度に達し、爆発を引き起こすとき、人びとは自覚し、認識し、決起する。こうして歴史は成る」ということでもあります。そしてこのことは、徳田球一の獄中十八年の歴史そのものがその正しさを立証しているのです。

私たちはもう一度、改めて、マルクス主義の正しさと、日本共産党（行動派）の歴史とわれわれの存在価値に確信と信念を堅持しようではありませんか。

### （一）偉大な十月とは何か。われわれにとって十月とはいかなる月なのか。

▼一九四五年十月十日は獄中十八年、非転向を貫き、共産主義者としての節を全うした徳田球一と日本共産党の行動派たちが獄中から解放され出獄した日であります。同時に日本軍国主義ファシズムが第二次

世界大戦（反ファシズム解放戦争）に敗北した結果として、多くの反ファシズム階級戦士と自由民主主義者が解放された日であります。

この年の五月八日、ドイツが無条件降伏。八月十五日には日本帝国主義も無条件降伏。第二次世界大戦は終わりました。

戦争が終わって二ヵ月すぎた十月三日、東久邇内閣の岩田宙造司法大臣や山崎巖内務大臣は内外の新聞記者に「政治犯の釈放などまったく考えていない」と語り、また「今後も治安維持の立場から共産主義者は容赦なく逮捕する」と語っていたのであります。ブルジョアジーは戦争の敗北よりも革命の方にこそ恐怖をいさぐのであります。徳田球一らの共産主義者は依然として獄中、しかも人の目につかぬように獄中深く捕われていたのであります。

これを発見したのは実に、連合軍に従軍して日本までやってきた西欧ジャーナリストたちでした。すなわち、ファシズムによって獄につながれている政治犯、特に共産主義者たちはまだ釈放されていないはずだとして、あちこちたずねまわっていた『ニューズウィーク』誌（米国）のアイザック、アヴアス（フランス通信）のギラン、マルキューズ（同極東支配人）などの記者でした。九月三十日、彼らは日本の獄吏の制止をふりきって徳田球一らに近づき、獄中の共産主義者に接し、ただちに連合軍司令部に通報し、同時に彼らは日本政府に質問しました。なぜ政治犯を釈放しないのか、と。これに対する回答が十月三日の山崎内相、岩田法相の記者会見での発言だったのであります。

これを聞いた連合軍司令部（マッカーサー司令官）はただちに命令した。特高警察を解体し、共産主義者をふくむ政治犯を解放せよ、と（十月四日）。だが日本政府はこれに抵抗、ついに十月五日、東久邇内閣は総辞職した。十月九日には戦前からの親西欧派政治家だった幣原喜重郎を首相とする内閣が成立。その翌日の十月十日、ここに徳田球一ら共産主義者は解放されたのであります。

このような歴史的事実はいったい何をわれわれに教えているのか。それはつまり、これらすべての政治的事件は、結局は、第二次世界大戦が反ファシズム解放戦争であった、ということ。日本帝国主義と天皇制ファシズムを打倒したのが反ファシズム解放軍であった、ということ。そしてこのような戦争の性格と、このような戦争を闘って勝利し、日本に進駐してきたのは反ファシズム解放軍であったということでありま

す。

このような歴史性、客観的事実、歴史の法則を知らぬブルジョア学者やブルジョア評論家が、徳田球一の“解放軍規定”を非難するのです。その中心に宮本修正主義が立っています。宮本修正主義やブルジョア歴史学者の誤りはどこにあるのか。それはつぎの点であります。

第一に、彼らは第二次世界大戦の階級性格をまったく理解していません。

第二に、その性格からして、日本を占領した連合軍の軍隊は、アメリカ軍が主体になっていたとはいえ、その初期は、やはり反ファシズム解放戦争を闘った軍隊としての政治的機能は果たしたのであります。現実に連合軍は天皇制ファシズムの解体・軍団主義の解体・共産主義者の獄中からの解放、など、一連の反ファシズム解放処置をとったのです。これをやったのはアメリカ政府とマッカーサーではなく、反ファシズム統一戦線の力が連合軍をして機能させたのであります。故に初期連合軍は明らかに反ファシズム解放軍でした。

第三に、にもかかわらず、第二次大戦後の新しい情勢（ソ連の強大化、中国革命の発展など）は第二次大戦中に形成させた反ファシズム統一戦線を分化させ、ソ・米の対立となり、必然的に日本占領軍も反ファシズム連合軍ではなく、米帝による単独占領へと転化（一九四六年の中ごろ）していったのです。

日本占領軍をはじめから米帝の単独占領と規定するなら、なんとありがたい米帝とマッカーサーであろうか。なぜなら、宮本顕治らは米帝とマッカーサーの手によって獄中から解放されたのであるから。ゆえ

に、米帝国主義を天までもちあげてこれを美化しているのはほかならぬ宮本顕治らであります。

こうして日本共産党が歴史上はじめて公然と再建、再組織され、十月十日は徳田球一による『人民に訴う』と『人民戦線アピール（綱領）』が内外に宣言された日であります。

▼一九五三年十月十四日、徳田球一は病氣療養中の中国・北京において死去しました。日本共産党の創立者であり、再建と再組織者であり、非転向と獄中十八年に代表される日本共産党（行動派）の革命的伝統の具現者たる革命家は、ここに五十九年の光栄ある生涯を閉じたのであります。

▼一九二八年十月六日は渡政が虐殺された日であります。日本共産党と日本革命の歴史上、プロレタリア出身者として、また直接労働運動の実践家として、そして徳田球一の無二の戦友にして、日本共産党草創期の書記長たる渡辺政之輔は、任務を終えて帰国途中の台湾において特高警察に包囲され、ついに「降伏よりも死を選ぶ」との革命的共産主義の節操にしたがって壮烈なる戦死（虐殺）を遂げたのであります。二十九歳の渡政はその青春を日本革命と日本人民にささげたのであります。

▼そして一九九三年十月に闘われたわれわれの十月闘争であります。あの時、われわれは政治上、経済上、組織上、いくたの敵からの攻撃をうけました。この時、私は書記長として「党は存在する。党は不滅である。党は生き続ける」とアピールしました。この十月闘争の勝利が、正統マルクス主義・わが大武思想をつくりあげたのであります。

以上が十月革命精神であります。

## （二）獄中十八年、不屈の非転向を貫いた徳田球一の十月革命精神をわれわれの手によって復興させ、実践しよう。

獄中十八年不屈の非転向を闘い抜いた徳田球一の英雄的行動はひとりわが党だけではなく、国際共産主義運動と内外革命運動にとって最大の誇りであり、最高の模範であり、輝かしい伝統であります。徳田球一とわが行動派党は獄中十八年間をどのように非転向で闘い抜いたのであろうか。獄中闘争の真実についてはわが徳田球一自身から聞くことにしたい。すなわち、出獄した翌年、一九四六年二月、時事通信社の求めに応じて、徳田球一は志賀義雄と共に事実を確認しながら獄中闘争記録を語りました。そのなかで彼は次のような事実を語っています（『獄中十八年』一九四七年二月、時事通信社刊）。

「一九三三年一月にはドイツでナチスが政権をとり、国際的にも反動勢力が攻勢を加えてきた。外部での共産党に対する攻勢に加えて、獄中でも共産主義者に対する思想的抑圧が強化された。佐野学、鍋山貞親、三田村四郎らはこのとき完全に敵に屈服し、党に対する裏切りをはじめ、一九三三年六月九日に、ついに彼らは天皇制を肯定する転向声明を公表したのである。市川正一、国領伍一郎、志賀義雄、そして私たちは転向組と分離し、非転向を誓い、闘争した。その年の十二月も暮れになってからわれわれはにわかには北海道へ送られることになった。網走刑務所に入れられた。十二月二十七日だった。北海道は、見渡す限り一面の雪にうずまっていた。ただ寒かった。骨の髄にしみとおるあの言語に絶する寒さはいまなお記憶のなかに冷たく凍りついている」

「網走の生活をおもうたびに、暴虐無残な天皇主義者たちのために、なかば計画的に殺された同志たちのことをおもわずにはいられない。市川正一、国領伍一郎、その他の同志たちはいずれもいたみきったからだをひっさげて、闘いぬいて死んだ。市川正一は網走の寒さでひどい神経痛にかかり、それから胃腸も悪くなって、いつも下痢をしていた。からだはゴツゴツにやせて見る影もなかったが、それでも泣き言一ついわず、くぼんだ目をギラギラひからせて、いつも囚人のみかたになって、不当な監獄当局と闘っていた」

「国領伍一郎は非常にかたい人で、あやまりというものを全然おかさない人だった。監獄のなかでも、終始厳格な態度で獄吏とたたかっていた。彼も、寒さとはげしい労働のために胃腸をいため、腸の消化の力がよわって便が出なくなった。監獄では、彼の衰弱がはげしいので、転向させようと計画して彼の弟を呼んで説得させたが、かれはかえって弟をしかりとぼした。かれは、一九四〇年に奈良へ移されたが、最後にわかれるときは骨と皮になり、ほとんど死人のように青ざめていた。その後も病気はおもくなるばかりで、とうとう大阪で死んだ。このようにすべて、だいたい網走などへおくるのは、一種の計画的死刑であった」

「われわれは、十数年の監獄生活を通じて、いつも、われわれがいま一度そとに出てはたらく日が来るであろうことを信じていた。そしてそのときに、われわれとしてはいったいどうするか、日本民族のさんたんたる状態を救うためにどうすればよいのか、新しい民主主義社会をどういうふうにしてうちたてるか、という問題を考えつづけていた。そしてわれわれは、機会を見つけてはお互いに連絡をとりあい、考えを出しあい、話しあい、議論しあい、われわれの計画をまちがいないものにするよう努力した。十月十日にそとへ出たわれわれが、出るなりすぐ日本共産党を再組織し、機関紙も出して、活発な活動をはじめることができたのは、監獄にいるあいだにすっかり準備をととのえていたからであった。たとえば「アカハタ」の一号にのせた『人民に訴う』や『当面の諸政策について』などもすでに獄中で書きあげてあった。またわれわれは、政府や資本家が生産をサボろうとするにちがいないことを見越していたから、労働者の手でこのサボをうちやぶって、日本の産業を再建していくには、争議のやり方も、かつてのストライキ一本やりではなく、生産管理闘争という新しい方式でゆかねばならない、などの計画も獄中のときから考えていた」

「十月十日午前十時、雨のふるなかをわれわれは出た。鉄のトビラをあけて、同志たがいに腕をくんで、監獄の外へ、自由の世界へ出た。雨のなかを赤旗をふりながら待っていている人たちの姿をみて、みな感激した。われわれはかねてこの日のあるを期して考えぬいておったわれわれの計画を実行するために、もはやためらうことなく、まっすぐに新しい闘いのなかに飛込んでいった」

以上のような徳田球一の獄中闘争の記録と、マルクス主義復興運動を闘う現在のわれわれの運動は、時代を超え、姿、形をかえてまったく同じ原理と法則が展開されています。

### （三）われわれは何者か。正統マルクス主義の党・日本共産党（行動派）であり、大武思想の党である。

行動派党の皆さん、新しい歴史時代の到来に当たり、私は改めて、「われわれは何者か」を問い直し、われわれに課せられた歴史的使命を立派に果たしていくよう強く呼びかけます。

わが党は一般的（基本的）には正統マルクス主義の党であり、特殊的に（日本において）は大武思想の党であります。それは国際マルクス主義運動の歴史、日本共産主義運動の歴史、そして現代の歴史時代がこのことを決定づけたのであります。

国際的には、フルシチョフが出現して「スターリン批判」を展開した、その瞬間から、われわれは一貫して、これはマルクス主義の哲学原理に違反しており、そして、これは早くからレーニンが警告していたとおり、まさにフルシチョフは修正主義的裏切り者であると断定、以後一貫してこれと闘ってきました。

国内的には、日本共産党に宮本修正主義が出現、党の創立者徳田球一を否定した、その瞬間から、ここに日本における修正主義があると断定、以後一貫してこれと闘ってきました。そして徳田球一が創建した「獄中十八年・非転向」という日本共産党の不屈の革命精神と革命的伝統を守り抜きました。日本共産党（行動派）歴史年表をみればわかるとおりです。

中国における文化大革命が日本共産主義運動に刺激をあたえ、日本国内に「文革左派」が発生したとき、中国共産党のあるチームからわれわれに一定の要求（左派連合）があったとき、われわれはマルクス主義の理論上の原則にもとづきこれを拒否しました。その後の歴史はわれわれが正しかったことを証明しています。

そして今日、イラク戦争が発生したとき、この帝国主義戦争はアメリカ帝国主義を崩壊へ導くだろうと予告しました。こう主張したのはわれわれだけであったが、現代の歴史がその正しさを証明しています。

われわれは常に、一貫して、正統マルクス主義とその理論上（思想上）の原理、理念、原則を守り通し、それを止揚しつづけました。マルクス主義の歴史と現代史がわれわれの正しさを立証しています。そしてこれらの闘いと運動においては常に大武礼一郎議長を中心に全党が統一し、団結し、結束しました。ここにわれわれの誇り、われわれの確信と信念があります。そしてこのような歴史が、科学的証明として「わが党は正統マルクス主義の党であり、大武思想の党である」ことを決定づけたのであります。

## 結 語

▼われわれは正統マルクス主義者である。そしてわれわれはその日本における唯一の党、大武思想と行動派党である！

▼われわれは哲学・科学の統一された絶対的真理を堅持した、人民と歴史の進路を導く灯台、羅針盤、道しるべである！

▼われわれは歴史の要求と、人民の要求と、運動と闘いの要求にもとづいて存在しているのであり、歴史が必然性に到達するまで存在し、運動し、闘いつづける！

▼われわれの思想信条は、マルクスが愛したあの言葉「汝の道を行け、人には語るにまかせよ」である！

▼われわれは歴史の中から生まれ、歴史と共に存在し、歴史と共に永遠に不滅である（以上）